Title	稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査(一)
Sub Title	A bibliographical research on manuscripts of Shikyoshoshiki (1)
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2022
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.56 (2021.) ,p.485- 529
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20210000-0485

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稻生若水撰『詩經小識』の伝本調査(一)

矢島 明希子

はじめに

『詩經小識』は、『詩經』に見える動植物についての名物書である。江戸時代中期の本草学者・稻生若水(一六五五―一七四五)によつて編纂され、草属二卷、木属・鳥属・獸属・魚属・虫属各一卷に加えて、これまで動植物とみなされてきたが実際はそうと考えられない語を収めた退類略一卷の計八卷から成る。本書編纂の発端は、新井白石が後に將軍家宣となる徳川綱豊に『詩經』を講義するに当たり、若水に委嘱して作成させたもので、完成したのは宝永六年(一七〇九)であった。日本人による『詩

經』の名物書としては初めてのものであるが、極めて限られた学問の場での参考書であつたためか、刊行されることなく写本でしか伝存していない。それでも、『詩經名物弁解』など刊本で広く流布した名物書に引用されるなど、その影響は小さくなかつた。そして日本における『詩經』講義のあり方や漢籍中の動植物の理解という点から見ても、無視できない一書である¹⁾。

しかし、現在のところその伝本がきちんと整理されているとはいいがたい。例えば、村山吉廣氏の解題は内閣文庫本を挙げておられるが²⁾、調査をしてみるとこの伝本には問題があることに気づく。写本では転写を繰り返す過程で誤脱が生じ、それがそのまま受け継がれるという現象が起きる。詳細は後述するが、

おそらく内閣文庫本は乱張のある底本をそのまま転写したものと見られる。こうした写本特有の問題を回避するためにも、多くの伝本を比較して整理する必要があるだろう。

そこで、まずは全国に散在する伝本を調査し、各本の特徴を整理してみたい。しかし、本稿では現在までに所蔵が確認されている伝本の全てを調査することがかなわなかった。それらについては、調査が可能になり次第追って調査を進めたい。

今回、原本を調査できた伝本は、次の十九点である。

1. 京都大学附属図書館 若水遺稿 (二二一イ一―貴)
2. 同 谷村文庫 (六一二一―シ二)
3. 同 谷村文庫 (六一二一―シ二)
4. 京都大学人文科学研究所 (二二三・三一―二八九)
5. 国立国会図書館 (八四六一―八)
6. 同 (特七―三七二)
7. 同 (二〇六一―三三)
8. 同 (特一―二九〇)
9. 同 (特一―二〇六〇)
10. 国立公文書館 内閣文庫 (一九六一―二二六)

11. 東洋文庫 岩崎文庫 (三―C―二二)
12. 都立中央図書館 河田文庫 (二二―KW―七〇)
13. 慶應義塾図書館 (CL―A―四―二九)
14. 岩瀬文庫 (二四―六〇)
15. 内藤記念くすり博物館 (四六二〇二)
16. 同 (四八三〇三)
17. 研医会図書館
18. 東京大学附属総合図書館 (B六〇―六八〇)
19. 同 (B六〇―二四六七)

このうち、京都大学附属図書館所蔵の稲生若水遺稿本は、若水の自筆本とされ、若水所縁の医家・雨森家寄贈の一本である³。これは、各伝本を比較検討する際に基準となり得る伝本といえよう。以下、断りなく本文を引用する場合は若水遺稿本に拠る。その他、画像で閲覧したものととして、次の三件がある。これらも参考に用いた。

- ・ 陽明文庫 (シ―二五、斯道文庫所蔵マイクロフィルムA一九九二B)
- ・ 東北大学附属図書館 狩野文庫 (二―一七八〇―一、東北大

学附属図書館狩野文庫マイクログ版集成BDH1001、丸善
・多和文庫（国文学研究資料館所蔵マイクログフィルム2711
四二一三）

なお、各項目名に附した番号は末尾【表1】・【表2】の番号
と対応している。

一、『詩経小識』の成立と構成

(一) 成立

各伝本を見る前に、本書の著者や成立について確認しておく
たい。本書を編纂した稻生若水は、名は宣義、字を彰信とい
加賀藩の本草学者として知られる。経学は伊藤仁斎（一六二七
一七〇五）に学び、医学は父の恒軒と福山徳潤について学ん
だ。本草学を志し、元禄六年（一六九三）には加賀藩主の前田
綱紀に召されて京都で本草学に専念することを許された。若水
の大きな成果といえば、『本草綱目新校正』の刊行と『庶物類纂』
一千巻の編纂であろう。残念ながら『庶物類纂』の編纂の途上
で若水は没してしまいが、徳川吉宗の命によって弟子たちが一
千巻に増補し、幕府に収められた。若水の学問は、経書・本草

書など漢籍から得られる知識と、当時興りつつあった物産学・
博物学的観察を併せ持つ点にあり、その門からは松岡玄達や野
呂元文等を輩出している。⁴

ただし、『詩経小識』についていえば、『詩経』に登場する動
植物の薬効などについて説くというよりも、漢籍中の語句をい
かに実際の物と対照させるかという名物学に主眼を置いた参考
書である。上述したように、本書は新井白石が、当時甲府藩主
だった徳川綱豊、すなわち後の家宣に『詩経』を講義するに当
たって、その参考書を若水に依頼したことから始まる。白石の
『折たく柴の記』には、次のようにある。

（元禄七年二月）十三日、始て詩経の講筵を開かる。此年
十一月廿日に至て、某講に侍る事、凡百六十二日にして功
終わりぬ。草木・鳥獸等のごときは、書師して凶せしめ、
かねてまゐらせしかば、これらの事を講ずるに便ありき。⁵

村松明氏はこの「書師」を稻生若水と注している。さらに、
新井白石が仙台藩の画家で書家の佐久間洞巖に宛てた書簡から
詳細が知られる（以下、句読点は筆者による）。

前世に詩經圖老朽撰呈の事御たづねに候。これは老朽三十七歳にてめし出され候は十二月の事にて、明春よりなにか進講と御たづねの時に……さらば詩經より御始め候べく候。……さて、詩には鳥獸草木の名は申すに及ばず、器物のごときおびたゞしき事に候。これも又一方の學に候へども、大人君子はそれらの末々の事を經生などの如くになされ候は、先務を急にするの道になく候。たとひそれらの事共講じ候とも、半日ほどづ、の日を費やし候事にて、事により志かたはなしのやうの事になり候てはいやしき事に候。故に望申候て繪圖を仕りたて、講日の前に段々に差上、とくと御内見の上にて講日には字面ばかりあらくと申候て、専らに詩意を講じ候やうに仕りたるに候。是により、藩邸の畫師狩野春湖を老朽へ御附け候き。さて、鳥獸草木之類は本邦に有之候だけは其比には先師いまだ現在も候。殊に加賀へ出候て千卷の書を撰したて候稻若水舊識に候故、これへ相談し候て、草木の根葉そのままにもとめ出し候て、生うつしにうつしたて、鳥獸またこれに同じく本邦になきものは長崎へたのみこし唐山よりとりよせられ候ものはと

りよせ、とりよせられ候はぬは生うつしに仕らせとりよせうつしたて、器物は博古圖より始めてふるきものを其ま、にうつしたて、周禮圖など殊に其料にたて候き。凡そ圖出來たち候處三百七十品。猶々老朽陳次第に今一往再校し候て淨寫し候やうにとの御事のうちに、御他界にてそれも夢になり候事に候き。これによりてさのみ事かけ候事もなく候き。

『詩經』を講ずる際に、あまた登場する動植物の類いを一々説明しては時間がかかるため、先に絵図を差し上げ、それをご覧いただくという計画である。白石はその絵図を作るために、まずはその分野に詳しい稻生若水に相談し、現物が手に入るものは中国から取り寄せてまで、絵師に写生させたという。

原田信氏によると、『詩經』の進講が始まった元禄七年（一六九四）の冬にこの絵図が完成したが、「今一往再校し候て淨寫し候やうにと」あるように、その翌年に白石は絵図の校訂を命じられたと推測している。

本書の自跋で若水は次のように述べる。

白石先生以德望博學、日侍經闈、輔聖化士、無賢不肖所共慶快、(義)生在遐方、不能常與門下士之賢者游聽、其議論之未深以爲恨也。去年秋遠枉乎、教存問甚厚、因命以撰次毛詩鳥獸草木、(義)淺陋何甚其任。自冬眼疾時發、加以鄙人家宅之私有奪之、不能一意考索。及今年夏得少間暇、於是畧紀飛潛動植、耳目之所親究者。至於其所不識之品、與此間不有之類、則存而不論也。稿成疎漏特甚、乃欲焚棄之數矣。惟恐因循不一成書有怠慢之罪、強寫錄敢獻左右、誠不勝慙汗之至。

寶永六年十月初五日 稻義謹識

これによると、若水は宝永五年(一七〇八)の秋に撰次を命じられたが、眼病などにより取りかかることができず、宝永六年の夏になってようやく取りかかることができたという。宝永六年は徳川綱豊が家宣として第六代將軍となった年である。白石が『詩経』の講読を始めたのが元禄七年、その後絵図の再校が命じられたのが元禄八年としても、それから十年以上も経っている。おそらく、この間にも絵図の校訂のために白石は若水

に助力を求めていたのだろう。本書はその成果をまとめたものと考えられる。

なお、若水は元禄六年に姓を稻生から稻に改めるが、本稿では稻生に統一する。

(二) 内容

村山氏は『詩経小識』をこの時製作された「詩経図」の「資料控」・「資料カード」と評している。確かに、項目ごとに俗名を挙げ、漢籍からその解説を収集する構成は「資料カード」の集成というにふさわしい。

例えば、卷二・草属の「賣」(1-44)には次のようである。

賣

俗名思已奈州山城 又名埋紫奈州筑前

賣牛脣、毛傳曰水葛也。如賣斷寸、寸有節、拔之可復。

爾雅

李巡云別二名、郭云如續斷寸、寸有節。陸璣以爲今澤葛也。

郭氏所不取。詩魏風汾沮如云、彼汾一曲言采其賣、毛傳云

賣水葛是也。爾雅

疏

「賣牛脣、狀如麻黃、亦謂之續斷其節、拔可復續生沙阪。」

鄭大森
爾雅註

曹氏曰、采賣以治疾。今考釋草、別有渝葛、釋云渝一名葛。

本草作澤瀉、知賣非澤瀉。嚴粲詩緝

按、賣今呼為杉菜是也。狀絕似麻黃、可茹其花、名筆頭菜、亦野蔬之佳者。

まず、『詩經』の動植物名を掲出する。この排列は、各属略の中で概ね『詩經』の排列に従って順序立てられている。また、召南・標有梅の「梅」(3-4、現在でいうところのウメ)と秦風・終南「有條有梅」の「梅」(3-38、毛伝に「柟也」とあり、クスノキのような木とされる)など同名異物と考えられるものは、同項に収めるのではなく、別に項目を立てる。

次に、日本での俗名を示し、地域性のあるものはその地域を附す。和名が分からないものは「未詳」や「不聞俗名」とするにとどめ、「象」(5-13)のような日本に産しない動物は「此方未有」などとする。また、「雀」(4-5)や「烏」(4-9)のように親しみのあるものについては、俗名を挙げるのみで詳しく論じていない。その他、「鳳凰」(4-37)や「麟」(5-

4) など、靈的な生物も「未詳」するにとどめている。

そして、漢籍から解説を年代順に引用し、その下に出典を明記する形式である。さらに補足があれば、末尾に「按」として按語を附す。引用を列挙せずに按語のみの項目もあり、例えば、卷四・羽属略の「鴻」(4-10)は、

按、此章及鴻飛遵渚・鴻鴈于飛之鴻、皆一物也。陸璣鴻飛遵渚疏云、鴻鵠羽毛光澤純白、似鶴而大、長頸肉美如鴈、又有小鴻大小如鳧、色亦白今人直謂鴻也。顏師古急就篇註云、鴻水鳥也。其色正白。如陸顔之說則鴻乃是白鴈也。非是。

と、按語中に漢籍を引用して考証している。按語には、「鴻」のように漢籍の考証など経学的なものもあるが、「賣」のように、日本での呼び名や形状、産地を述べる項目も少なくない。

引書は次の通りである。その他、按語の中で言及のある書目もあるが、ひとまず独立して本文が引用されている書目を以下に挙げる(年代順、表記は若水遺稿本に従った)。

爾雅／毛傳／鄭箋／晉張華博物志／晉郭璞爾雅注／唐陸璣毛詩草木鳥獸虫魚疏／陸德明詩釋文*／唐顏師古急就篇註／唐

孔穎達毛詩疏／唐陳藏器本草拾遺／本草圖經／宋丘光庭兼明書＊／宋邢昺爾雅疏／宋陳翥桐譜＊／宋歐陽公詩本義／嘉祐補註本草／宋沈存中夢溪筆談／宋沈存中補筆談＊／宋陸佃埤雅／宋鄭夾漈爾雅註／宋鄭夾漈昆蟲草木略／宋寇宗奭本草衍義／朱文公集傳／宋羅願爾雅翼／宋呂東來讀詩記／宋周公謹癸辛雜識續集＊／宋嚴粲詩緝／毛詩集解／江陰縣志＊／重修鎮江府志／寧波府志＊／興化府志＊／漳州府志＊／邵武府志／汀洲府志＊／明周憲王救荒本草／明田藝蘅留青日札＊／明李東璧本草綱目／明吳元化毛詩鳥獸草木考／明周文華致富全書／明謝肇淛五雜俎＊／天台山方外志＊／明沈萬鈞詩經類考＊／明王蓋臣群芳譜／明顧夢麟詩經說約／明毛晉陸疏廣要／清方以智通雅／清皖桐方氏物理小識＊／清王夢白詩經廣大全／清陳漢子秘傳花鏡＊

古くは『爾雅』から、新しくは清朝に刊行された書物まで幅広い。これらの中には『毛詩草木鳥獸中魚疏』（以下、陸疏）のように頻出するものもあれば、＊を附した書目のように一度しか引かれていないものもある（以下、引書名は『』を省く）。以上に、『詩經小識』の成立など概要を述べた。次に、各伝本について具体的に見ていきたい。

二、『詩經小識』の伝本について

各伝本について紹介する。各本の解説は以下の標目の順で記した（有しない場合は省略）。

- ①表紙・外題、②副葉子など、③序・目録、④本文卷首・張数、⑤体式、⑥尾題、⑦附録・跋文、⑧識語・奥書、⑨書入・印記、⑩備考・異同

なお、⑩の異同は、若水遺稿本との比較である。また複数の伝本に共通するものが多く見られたため、重複を避けて各伝本固有の異同に限り、複数の伝本に共通する異同についてはまとめて後述する。

○京都大学附属図書館

1. 二一―一―貴 若水遺稿（四五・四六）

詩經小識八卷

和大二册

稲（生若水）（稲義）撰

〔江戸中期〕寫（自筆） 雨森良意家舊藏

①後補標色正繫地蜻蛉飛雲文空押艶出表紙（二七・三×十八・

一穂)、左肩に子持杵題簽を貼付し「稻生若水遺稿 四十五(四十二)」と墨書。題簽の下に打付墨書にて原外題あり。

②副葉子一張。

④「詩經小識卷一／(低二格)草屬畧第一／苻／(以下低一格)不聞俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き〈第一冊〉六十張、〈第二冊〉四十二張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十一行十六字、字面高さ約十八・三穂。

⑥「詩經小識卷幾終(畢)」

⑦卷八尾題後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり、跋文の尾に「彰／信」方形陽刻朱印記、「印／宣義」方形陰刻朱印記あり。

⑨書入…(本文別筆A)間々眉上に墨筆にて按語書入あり、「成效…:…」として松岡玄達や『詩經名物弁解』から引用して補注を附す。(本文別筆B)「君章按…:…」として「蓬」(1-29)に補注を附す(末尾に「己丑七月七日」と記す)。印記…每冊見返しに「克／昌」方形陰刻朱印記、「好／義／堂」方形陽刻朱印記あり。每冊首に「安雅園／圖書」方形陽刻朱印記、「(雨森良意) 寄贈本」長方形楷書陽刻朱印記あり。

⑩若水と所縁のある雨森良意家から寄贈された自筆稿本などのコレクシヨ「若水遺稿」の一部で、該本も若水の蔵書印を有し、自筆とされる。ただし、書入Aは若水の門人の松岡玄達や、享保十六年(一七三二)に刊行された江村如圭撰『詩經名物弁解』などを引いており、少なくともこの書入は享保十六年以降と考えられる。

2. 谷村文庫 六一二一シ一(A)
詩經小識八卷

稲(生) 若水撰

和大一冊

文政三年(一八二〇)寫

①後補灰色表紙(二十三・六×十七・八穂)、左肩に単辺刷杵題簽を貼付し「詩經小識」と墨書、原表紙は本文共紙、中央に「詩經小識初稿」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／(低二格)艸屬略第一(隔四格) 稲 若水 著／苻(不聞／俗名)／(以下低一格) 苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸」、引書ごとに改行。墨付き全九十八張(卷三の第一張と第二張を錯綴)、一筆。

- ⑤ 無辺無界、每半葉十行十六字、字面高さ約十九・八糎。
 ⑦ 卷八後、改張せずに附録「羅木」、改張して若水跋文あり（宝永の年記なし）。

⑧ 大尾に「文政三年四月吉日」と墨書。

⑨ 書入・朱句点あり、間々朱筆にて俗名に読み仮名、校注あり

（本文同筆）。印記・目録首に「内／山」方形陰刻朱印記、「金氏圖／書之記」長方形陽刻朱印記あり（金子家）。

⑩ 金子家は江戸時代後期の金沢の儒者の家柄。

「柞」（3-58）の按語を欠く。

3. 谷村文庫 六一二一―シ二（B）

詩經小識八卷

和大一冊

稲（生若水）（稲義）撰

文政六年（一八二三）寫（春水）

① 縹色雷文地桐唐草文空押表紙（二三・二×十六・三糎）、左肩に子持枰題簽を貼付し「詩經小識（全）」と墨書。

③ 「詩經小識初稿目録」

④ 「詩經小識卷一／荇（不聞／俗名）／（以下低一格）荇一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行。墨

付き全七十四張、一筆。

⑤ 「青藍堂藏」墨刷野紙、四周单边（十七・六×十二・七糎）、

有界、每半葉十一行、行二十字書写、版心白口单黒魚尾、匡郭外右下に張数を朱書。

⑦ 卷八後、改張せずに附録「羅木」、宝永六年若水跋あり。

⑧ 大尾に「文政六年九月廿四日（隔五格）春水寫」と墨書。

⑨ 書入・間々朱筆にて俗名に読み仮名、校注あり（本文同筆）。

⑩ 「蕨」（1-24）の項目名を「蟲」に作る。「竹」（3-17）

の項目名を「作」に作る。「木桃」（3-21）の項目名の「桃」字を欠く。「鳴鳩」（4-17）の項目名の「鳩」を欠く。「鞞」（4-26）の項目名を「鞞」に作る。

○ 京都大学人文科学研究所

4・二三・三一―I―二八九

詩經小識八卷

和大二冊

稲（生若水）（稲義）撰

（江戸中期）寫 田安家舊藏

① 香色表紙（二七・四×十八・四糎）、左肩に单边刷枰題簽を貼付し「詩經小識（自幾至／幾）」と墨書、右肩に打付に

て「九番」と墨書。

③「詩經小識初稿目錄」

④「詩經小識卷一／（低二格）草屬略第一／苻（隔二格）不聞俗名／（以下低二格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在、概ね引書ごとくに改行、按語はさらに一格低す。墨付き

〈第一冊〉五十一張、〈第二冊〉三十六張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉九行十九字、字面高さ約十九・三糎、柱に卷数と張数を墨書。

⑥「詩經小識卷幾」

⑦卷八尾題後、改張して附録「羅木」、その後さらに尾題「詩經小識卷八終」、宝永六年若水跋あり。

⑧書入・藍筆にて句点あり、朱筆にて行間に校注、まれに朱引・詩經篇名あり、墨筆にて俗名に読み仮名、眉上に音注・補注あり（本文同筆）。印記・每冊首に「獻英樓／圖書記」長方形陽刻朱印記（田安家）、「田安／府芸／臺印」方形陽刻朱印記、「月江／秘笈」方形陽刻朱印記あり。表紙右下に「田藩〔文庫〕」長方形楷書陽刻墨印記あり。

⑩「卷耳」（1-3）の爾雅註を「爾雅翼」に作る。「鳳凰」（4-37）の「未詳」、「鯨」（6-9）の按語を欠く。

○国立国会図書館

5. 八四九-八（A）

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

〔江戸後期〕寫

和半一冊

①香色表紙（二十三・九×一六・五糎）、外題なし。
②副葉子一張。

④「詩經小識卷一／（低二格）草屬略第一／苻／（以下低一格）不聞俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在」、引書ごとくに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全九十五張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行十九字、字面高さ約十九・五糎。

⑦卷八後、改張せず宝永六年若水跋、附録「羅木」あり。

⑨まれに眉上に本文と同筆の校注あり。

⑩「麻」（1-35）、「象」（5-13）を欠く。「螽斯」（7-1）の邢昺爾雅疏の引用を欠き、鄭夾漈爾雅註を「夾漈爾雅疏」と表記する。

6. 特七-三七一（B）

詩經小識八卷

和半二册

稲生若水撰

每册首右下に刪去跡あり。
⑩ 関松窓（一七二七一八〇二）は名脩齡、前橋藩儒。

天明八年（一七八八）寫（寄合書） 關松窓校訂識語書入

伊藤篤太郎舊藏

7. 二〇六一二二二（C）

① 香色表紙（二三三・五×十六・八糎）、左肩打付にて「詩經

詩經小識八卷

和半二册

小識（稲生若水著） 乾（坤）と墨書。

稲（生若水）（稲義）撰

③ 「詩經小識初稿目錄」

享和二年（一八〇二）寫（桃花園） 榊原芳野舊藏

④ 「詩經小識卷一」（低二格）草屬略第一「」全錄／苻不

① 新補茶色「帝國圖書館藏」型押表紙（二三三・二×一五・八

聞俗名／（以下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘
浮在水上根在水」、引書ごとく改行、按語はさらに一格低す。

糎）、左肩に子持枠題簽を貼付し「詩經小識「」乾（坤）」
と墨書、原表紙は淡茶色表紙、左肩打付にて「詩經小識「」
乾（坤）」、右肩より篇名を墨書。

墨付き（第一冊）四十三張（本文の第三張と第四張、第八張

③ 「詩經小識初稿目錄」

と第九張を錯綴）（第二冊）三十二張、寄合書。

④ 「詩經小識卷一」（低二格）草屬第一／苻不聞俗名／（以

⑤ 無辺無界、每半葉十行二十四字、字面高さ約二十・四糎。

下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根在

⑥ 「詩經小識卷幾終」

水」、概ね引書ごとく改行するが不定、按語はさらに一格低す。

⑦ 卷八後、続けて附録「羅木」、改張して宝永六年若水跋あり

墨付き（第一冊）四十九張、（第二冊）三十五張、一筆。

「寶」を「寛」に誤る。

⑧ 大尾に「天明戊申七月「」松窓関脩齡校完」と墨書

⑤ 「龍珠館」墨刷罫紙、四周单边（二八・八×一三・六糎）、

⑨ 書入・間々墨筆にて俗名に読み仮名、眉上に校注あり。印記…

有界、每半葉十行、每行二十字書写、版心白口单黒魚尾。

每册首・表紙に「伊藤／篤太／郎記」方形陽刻朱印記あり、

⑥ 「詩經小識卷幾終」

⑦ 卷八尾題後、改張して附録「羅木」、その後さらに尾題「詩

經小識卷八終」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑧ 大尾に「享和二年十月（隔五格）桃園園藏」と墨書（本文同筆）。

⑨ 書入・間々墨筆にて俗名に読み仮名、眉上に朱墨校注あり（墨

筆は本文同筆、朱筆は別筆か）、朱句点・朱引あり。印記・

毎冊首に「寄心／那裏」方形陰刻朱印記、「故榊原芳楚納本」
隸書長方形陽刻朱印記あり。

8. 特一―二九〇（D）

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

和大一冊

文化六年（一八〇九）寫（服部氏）白井光太郎舊藏

① 灰色地綠色叢雲文表紙（二七・二×十九・六糎）、左肩打付にて「詩經小識」「完」と朱書。

② 「詩經小識叙目」

③ 「詩經小識卷一」（低三格）草屬畧第一／待 不聞俗名／（以

下低一格）若一名接余白莖葉紫赤色正円徑有餘浮在水上根在水低、引書ことに改行せず、按語は改行し二格低す。墨付

き全五十二張、一筆。

⑤ 無辺無界、每半葉十三行二十五字、字面高さ約二十六・六糎。

⑦ 卷八後に続けて附録「羅木」、宝永六年稻生若水跋あり。

⑧ 大尾に「稲氏小識借野津氏寫之／文化六_己年夏四月「_子」
服子一」書寫識語あり。

⑨ 書入・間々墨筆にて俗名に読み仮名、朱墨校注あり（本文同

筆か）、朱句点・朱引あり。印記・表紙外題に「服部」小
葉形陽刻朱印記、冊首に「服部氏／藏書印」長方形陽刻朱印

記、識語に「南／□」円形陽刻朱印記、「服部／之印」方形
陰刻朱印記、巻首に「白井氏藏書」隸書長方形陽刻朱印記あり。

⑩ 「荏菽」（2―22）・「樸楸」（3―5）の孔穎達疏の引書名を
「唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏」に誤る。「宵行」（8―4）の
按語を欠く。

9. 特一―二〇六〇（E）

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

和大一冊

稲（生若水）（稲義）撰

① 淡茶色表紙（二四・〇×十七・〇糎）、左肩打付にて「詩

經小識「一全」と墨書。

- ④「詩經小識卷之二／（低三格）草屬畧第一／苻／（以下低一格 俗名揆索索）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全九十六張、一筆。

- ⑤無辺無界、每半葉十行二十字、字面高さ約十九・五糧。

- ⑦卷八の後、改張せず宝永六年若水跋、附録「羅木」あり。

- ⑨書人・墨筆にて間々俗名に読み仮名あり。印記・冊首に「白井／光」方形陽刻朱印記あり。

- ⑩若水遺稿本をはじめ、多くの伝本が「苻」（I-1）の俗名を「不聞俗名」としているのに対し、該本（I-1）は「俗名揆索索」とする。

また、巻一の項目の排列が他本と異なる上に内容に混乱が見られる（末尾【表2】参照）。おそらく乱張のある底本を転写したものであろう。例えば、「非」（I-16）は、若水遺稿本ではただ「未詳」とされ、引用も按語もない。しかし、該本では「未詳」の語を欠き、「莠」（I-42、該本ではI-20）の引用と按語に置き換わっている。では、本来「非」の内容である「未詳」はどこへ行ったのかというと、おそらく

該本の「唐」（I-41）の末尾に附された「未詳」がそれに当たるものと考えられる。他本の「唐」（I-22）は、俗名の後に「麟按諸書唐蒙女羅菟絲王女松羅兔丘免蘆菟縷赤網菟鬘亦十一名……」と、詩經説約の一節を引くが、該本の「唐」は、

俗名烏施那索胡眠莫^{ツシノソクカモ}_{近江}
麟按諸書唐蒙女羅菟絲王女松羅兔丘免蘆菟

未詳

となっているのである。これは、詩經説約の引用が途中で「非」の「未詳」に置き換わってしまったものと考えられよう。この「唐」の後には、本来「非」後に続くべき「茶」（I-17）・「薺」（I-18）・「荅」（I-19）と続いていくことから、この「未詳」が実は「非」の解説であったことがうかがえる。その他、混乱のある項目は末尾【表2】に太枠で示した。具体的には次の通りである。

・「非」（I-16）は全て「莠」の内容。「非」の内容は「唐」へ。
・「薺」（I-18）の陸疏「蘭以爲佩」以下は「簡（蘭）」の内容。「薺」の残りは「荅」へ。
・「莠」（I-20）の「馬蓼甚長大」以下は「龍」の按語。「莠」

の残りの内容は「菲」へ。

・「簡（簡）」（I-23）の陸疏「楚辭云紐秋」から先を欠く。「簡（簡）」の残りは「賣」へ。

・「龍」（I-28）の「不問俗名」以下は「蓬」の内容。「龍」の残りは「莠」へ。

・「推」（I-31）の内容に加えて、本来「唐」の内容である詩經説約「縷赤綱免累」が付加。

・「蓬」（I-38）は全て「荅」の内容。「蓬」の内容は「龍」へ。

・「唐」（I-41）の末尾の「未詳」は「菲」の内容。「唐」の残りは「推」へ。

・「荅」（I-44）は全て「賣」の内容。「荅」の内容は「蓬」へ。

○国立公文書館

10. 内閣文庫（二九六一―二二六）

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

〔江戸後期〕 寫 和学講談所舊藏

①斜刷毛目表紙（二十八・八×十九・八糎）、左肩に子持梓題

簽を貼付し「詩經小識」「上（中・下）」と墨書。

和大三冊

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低三格）草属略第一／苻 不問俗名／（以下低二格）苻一名接余曰莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き（第一冊）

三十張、〈第二冊〉三十二張、〈第三冊〉二十一張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行二十字、字面高さ約二十三・〇糎。

⑥附録後「詩經小識卷八終」

⑦卷八後、改張して附録「羅木」、尾題後、宝永六年若水跋あり。

⑧書入・初めの数張のみ藍筆にて校注あり。間々墨筆にて俗名に読み仮名あり。印記・毎冊首に「和学講談所」楷書長方形

陽刻朱印記、「浅草文庫」楷書長方形陽刻朱印記、「書籍／館印」方形陽刻朱印記、「日本／政府／圖書」方形陽刻朱印記あり。

⑩該本は、総じて略字が多く、全体にわたって「草（山）」を

「山」に誤写している。また、「苻」（I-1）の俗名「不問俗名」に藍筆小字で「挨索索」と注記する。「梟」（4-38）

を欠く。巻一・二は他本と排列を異にし、国会E本同様、複

数の項目で別項目の内容が混入していることから、これも乱張のある底本をそのまま転写したものと想像される。具体的

には次の通りである(末尾【表2】参照)。

- ・「卷耳」(①-3)の陸疏「蓬牛類」以下は「蓬」の内容。「卷耳」の残りは「薇」へ。
- ・「莞」(①-5)の按語「爲笠及(簑)衣」以下は「臺」の按語。「莞」の残りは「繫」へ。
- ・「蓬」(①-10)の夢溪筆談「蒿之」以下は「蒿」の内容。「蓬」の残りは「卷耳」へ。
- ・「臺」(①-13)の按語「惟臺可以」より後ろを欠く。「臺」の残りは「莞」へ。
- ・「蒿」(②-2)の本草綱目「葵菜」以下は「葵」の内容。「蒿」の残りは「蓬」へ。
- ・「來牟」(②-10)の末尾に「著」の按語「謂花紅紫」以下を付加。
- ・「葵」(②-14)の本草綱目「蒲叢生」以下は「蒲」の内容。
- ・「葵」の残りは「蒿」へ。
- ・「著」(②-17)の按語「河廣註」以下は「兼葭」の内容。「著」の残りは「來牟」へ。
- ・「蒲」(②-23)は俗名より後ろを欠く。「蒲」の残りは「葵」へ。
- ・「兼葭」(②-28)の爾雅翼「美又韋曜(昭)問答」以下は「莠

の内容。「兼葭」の残りは「著」へ。

- ・「莠」(②-33)の爾雅翼「似稷無」より後ろを欠く。「莠」の残りは「兼葭」へ。
- ・「茶」(②-38)の末尾に「又名各卜奈」以下「芄蘭」の内容を付加。
- ・「艾」(②-45)の内容に「荅」の夢溪筆談「山(草)也其山(草)」以下を付加。
- ・「芄蘭」(②-53)の「比(此)与蕪菁」以下は「葑」の内容。「芄蘭」の残りは「茶」へ。
- ・「荅」(②-57)の通雅「覆屋織壁」以下は「葭」の内容。「荅」の残りは「艾」へ。
- ・「葑」(②-59)の本草図経「六月」以下は「白茅」の内容。「葑」の残りは「芄蘭」へ。
- ・「葭」(②-60)の本草拾遺「薇上(生)於水傍」以下は「薇」の内容。「葭」の残りは「荅」へ。
- ・「白茅」(②-63)の爾雅疏「毛傳云」以下は「繫」の内容。「白茅」の残りは「葑」へ。
- ・「薇」(②-65)の爾雅註「細蔓被也」以下は「卷耳」の内容。「薇」の残りは「葭」へ。

・「纂」(②-69)の「心中生地」以下は「莞」の内容。「纂」の残りは「白茅」へ。

この他、「贄」(②-30)と「蒨」(②-31)は内容の混乱こそないものの順序が他本と異なる。また、「來牟」(②-10、85)・「稌」(①-14、②-86)、「蓼」(①-15、②-87)・「菲」(①-16、②-88)が重複している。

○東洋文庫

11. 岩崎文庫 三・C・一・二

詩經小識八卷

和大合三冊

稲〔生若水〕(稲義)撰

〔江戸後期〕寫 安西雲煙舊藏

①後補淺葱色表紙(二十八・〇×十九・九糎)、左肩に紙箋を

貼付し「詩經小識」「^レ幾」と墨書。

③「詩經小識初稿目錄」

④「詩經小識卷一」(低二格)草屬畧第一／苻／(低二格)不

聞俗名／(隔三行、以下低一格)苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上、間々俗名から一行ないし數行空けて漢籍を引用する。引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨

付き(第一冊)三十五張、(第二冊)二十一張、(合三・四冊)四十二張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行二十一字前後、字面高さ約二十一・五糎。
⑦卷八後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑨書入・眉上あるいは行間に墨筆にて校注あり(本文別筆)。
印記・各冊見返に「^レ子／孫／永／保」／雲煙家／藏書記
楷書長方形陽刻墨印記(安西雲煙)あり。

⑩安西雲煙(一八〇七-一八五二)は江戸後期の書画鑑定家。「騶虞」(5-11)の項目名の「虞」字を欠く。

○都立中央図書館

12. 河田文庫 一・二一・KW一七〇

詩經小識八卷

和大二冊

稲〔生若水〕(稲義)撰

〔江戸後期〕寫 (温故齋) 河田烈舊藏

①香色表紙(二十五・二×十六・〇糎)、左肩に打付にて「詩經小識」「^レ乾(坤)」と墨書。

②每冊副葉子一紙。

④「詩經小識卷二／（低二格）草屬略第一／苻 不聞俗名／（以下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、概ね引書」とに改行、按語はさらに一格低す。墨付き（第一冊）五十三張、〈第二冊〉三十六張、一筆。

⑤墨刷罫紙、四周双辺（十七・五×十二・一糎）、每半葉九行、每行二十字書写、版心白口單黒魚尾（每卷首第一張上象鼻に「詩經小識」と墨書、卷ごとに張数書入、卷三第六張は下象鼻に「温故齋藏」と印刷）。

⑥「詩經小識卷幾（終）」

⑦卷八尾題後、改張して附録「羅木」、その後さらに尾題「詩經小識卷八終」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑧書入…朱句点あり。墨筆にて間々俗名に読み仮名、眉上に音注・補注あり（本文同筆）。稀に藍筆にて批点あり。印記…每冊首に「河田文庫」長方形陽刻朱印記、「愛警／盧珍襲」長方形陰刻朱印記、「風自樓藏弁」長方形陽刻朱印記。

⑩「菜」（2・16）の項目名を「菜」に作る。「鳳凰」（4・37）と「梟」（4・38）の順序が転倒している。「罷」（5・27）の項目名を「罷」に作る。

○慶應義塾図書館

13・C・L・A・四・二九

詩經小識八卷

和半二冊

稻生「若水」（宣義）撰

〔江戸後期〕寫 東敬治舊藏

①後補標色布目雲文型押艶出表紙（二十三・二×一七・〇糎）、左肩に単辺刷梓題簽を貼付し「詩經小識〈稻生宣義著〉幾之幾」と墨書。

③「詩經小識初稿目錄」

④「詩經小識卷一／（低二格）草屬畧第一／苻／（以下低一格）不聞俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き（第一冊）五十七張、〈第二冊〉四十張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行二十字、字面高さ約十九・七糎、每卷首のみ柱下辺に「卷幾」と記す。

⑥「詩經小識卷幾終」（卷三は欠）

⑦卷八後、改張して宝永六年若水跋文、さらに改張して附録「羅木」あり。

⑧書入…まれに朱筆校注あり、跋・附録のみ朱句点あり。印記…

卷一首に「東印／敬治」方形陰刻朱印記あり。

⑩東敬治（一八六〇―一九三五）は明治の陽明学者。

「蟾蛤」（7・13）の項目名の「蟾」字を欠く。

○岩瀬文庫

14・二四―六〇

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

寛政六年（一七九四）寫（山本）封山

和半一册

①浅葱色雷文地唐草文型押艶出表紙（二十三・七×十七・二糎）、

左肩に子持枠題簽を貼付し「詩經小識」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）艸属略第一／苻（不聞／俗名）

／（以下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸」、引書

ごとくに改行。墨付き全九十六張、一筆。

⑤无边無界、每半葉十行一六字、字面高さ約一九・八糎。

⑦卷八末尾に附録「羅木」、改張して宝永六年若水跋文あり。

⑧大尾に本文同筆にて「寛政甲寅夏四月廿二日封山香」と墨書。

⑨書入…間々朱筆にて俗名に読み仮名、まれに校注あり。印記…

冊首に「讀書堂／珍藏記」長方形陽刻朱印記あり。

⑩山本封山（一七四一―一八一三）は高岡出身の儒医で、本草

学者・山本亡羊の父である。京都西本願寺の法王に仕えた山

本与右衛門の養子となり、封山も法王に仕えるが、天明六年

（一七八六）に辞職。京都に山本讀書塾を開き、以降は多く

の医学生を教えた。寛政七年（一七九五）には加賀前田侯よ

り招聘されたが、これを断り在野の儒医に専念した。封山は

多くの写本を残し¹⁰、その多くは岩瀬文庫の所蔵されている。

○内藤記念くすり博物館

15・四六二〇二（A）

詩經小識八卷

和半一册

稲（生若水）（稲義）撰

〔江戸後期〕寫 中野康章舊藏

①縹色雷文地桐唐草文型押表紙（二十三・七×十七・七糎）、

外題なし。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）草属略第一／苻（以下低一格）

不聞俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」引書

ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き全九十六張、一筆。
⑤無辺無界、每半葉十行二十字、字面高さ約二十一・二糎。
⑦巻八後、改張して宝永六年若水跋、さらに改張して附録「羅木」あり。

⑨書入・朱筆にて句点・朱引・校注あり。間々眉上に朱墨の校注あり(主に和刻本陸疏と校合、本文同筆)。印記・冊首に「竹田/定□」方形陰刻朱印記、「康章/珎藏」方形陰刻朱印記、「傳家宝」長方形陰刻朱印記、「大同藥室/祕藏圖書」長方形陽刻朱印記あり。巻一首に「康章/士印」方形陽刻朱印記あり。
⑩「鵬」(4-18)と「鴟鵂」(4-19)の間に「倉庚」の項名のみを掲出する。「螻」(7-5)と「蒼蠅」(7-6)の間に「蛾」の項名のみ掲出する。ともに他本にはない項名である。

16・四八三〇三(B)

詩經小識八卷

稲(生若水)(稲義)撰

〔江戸後期〕寫 富岡謙藏・中野康章舊藏

①標色巾繫地菊文艶出表紙(二六・九×十九・一糎)、左肩に紙箋を貼付し「詩經小識(自一/至八)」と墨書。

和半一冊

②副葉子一張。

④「詩經小識卷一/(低二格)草屬暑第一/苻/(以下低一格)

不間俗名/苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。書名は初出以降略記する場合が多い。墨付き全八十六張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行二十二字、字面高さ約十九・八糎。

⑦巻八後、宝永六年若水跋、附録「羅木」あり。

⑨印記・表紙題簽に「歩/□月」方形陽刻朱印記あり。冊首に「富岡謙/大正紀元/後所得」方形陰刻朱印記、「康章/珎藏」方形陰刻朱印記あり。

⑩富岡謙藏(一八七三-一九一八)は画家・富岡鉄斎の子で、山本封山の子孫と親交があった。¹¹⁾

○研医学会図書館

17・研医学会図書館

詩經小識八卷

稲(生)若水撰

文化九年(一八一二)寫(米關陳人) 文化十四年(一八一七)書写者校注書入

和大一冊

① 香色表紙（二十七・八×十七・八糎）、左肩に子持粹題簽を貼付し「詩經小識」「全」と墨書、康熙綴。

③ 「借音契字凡例之図〈小字附録／者同上字〉」一張。和名の借音字を五十音順に示し、朱小字にて仮名を附す。裏に墨筆にて「此書所記和名難讀者蓋摠于全瀨兵制而記也其音／皆係於華音故不通於凶音者居半焉今〈予〉聊者借音之例／以備參考讀者照于此図以立推察矣／文化壬申春三月之望（隔二格）後孝（隔二格）米關拙著（隔二格）誌」と記す。改張して「此書原本無目録今始記載目録以便覽焉」と墨書し、各巻の細目を記す。

④ 「詩經小識卷一／（低三格）草属略第一（格三格）「若水／白石 全 輯／苻（隔二格）不聞俗名／（以下低二格）苻一名接余白莖葉紫赤色正円徑寸餘浮在水上」、二張目以降は俗名・引用・按語を改行せず「○」で区切る。墨付き全五十九張、一筆。

⑤ 無辺無界、每半葉十行二十二字前後、字面高さ約二十二・五糎、巻ごとく改張せず。

⑦ 巻八後、附録「羅木」、宝永六年若水跋あり。

⑧ 大尾に墨筆にて「文化壬申春三月中澣書于東都／」「米關

陳人」書写識語、隣に朱筆にて「文化張丑冬十月中澣校于松本／」「米關又記」校訂識語あり。

⑨ 全体に朱筆にて句点、本文中あるいは眉上に朱校注、また眉上に墨筆にて「珍按……」等校注あり（すべて本文同筆、「異本」「二本」「イ」と異本注記）。

⑩ 首に独自の「借音契字凡例之図」と細目を附す。「此書原本無目録」ということから、他本に間々ある「詩經小識初稿目録」も欠けていたのであろう。題目の撰者名に若水と白石を並記する形式も他には見られない。全体にわたり綿密に他本と校合している。例えば「甘瓠」（214）は底本では欠けていたと見られ、これを行間に墨筆で補い、眉上に「甘瓠一條／異本ニヨリテ／補フ」と注記している。「栩」（3135）の陸疏は「或謂之」以下を欠くため、眉上に墨筆にて「珍按此條有／脱文可考」と注記し、本文を朱筆にて補っている。

○ 東京大学附属総合図書館

18・B・6〇一・六八〇（A）

詩經小識八卷

稲（生若水）（稲義）撰

和半一冊

寛政三年（二七九）寫（谷懋） 渡辺信舊藏

① 新補洋装表紙（二十三・九×十六・八種）、背に「詩經小識」

と金字刻印、後補洋装副葉子一張、原表紙は素紙（高さ二十

三・二種）、左肩打付にて「詩經小識」と墨書。

② 副葉子一張。

④ 「詩經小識卷之一」（低二格）草屬畧第一／苻／（以下低一格）不開俗名／苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上根在水底、引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付

き全六十八張、一筆。

⑤ 無辺無界、每半葉十二行二十五字前後、字面高さ約十九・二種。

⑥ 「詩經小識卷之幾」

⑦ 卷八尾第後、宝永六年若水跋、附録「羅木」あり。

⑧ 大尾に墨筆にて「寛政三年辛亥仲秋既生卒業／」「」谷懋

書写識語あり。

⑨ 墨筆にて間々俗名に読み仮名、眉上に毛伝による補注、校注あり（稀に「二本」「東雅」と校合）、稀に朱筆校注あり。印記・巻首に「下楚國／渡部氏／藏書印」長方形陽刻朱印記あり。

⑩ 「蕨」（1-10）の爾雅・「舜」（3-26）の興化府志・「桑扈」（4-28）の本草綱目・「羔羊」（5-5）の毛伝・「麇」（5

1-6）の本草図経の引書名を欠く。「木瓜」（3-20）は初行の「木瓜葉如鏡梗海棠……花深紅色」までは致富全書からの引用であるが、その後は「云々（本草／綱目）」として終わっており、これ以下の引用を欠く。「獫狫驕」（5-20）の末尾に「原本此下脱一張紙可憾姑俟他日補今采脱闕者／四品名掲存于左」と記し、「貉」・「狸」・「魚」・「熊」の名のみ掲出。「莎雞」（7-10）の陸疏「六月中飛而」の後は一行分脱落し、改行せずそのまま兼明書の引用に接続する。

19. B六〇―二四六七（B）

詩經小識八卷

和大一冊

桶（生若水）（桶義）撰

〔江戸後期〕寫 河野通之舊藏

① 後補洋装表紙（二十六・二×二十・七種）、後補洋装副葉子一張、原表紙灰色宝文雲母刷表紙（高さ二十八・五種）、左肩打付に「詩經小識（全）」、右下に「第一函」と墨書。

② 副葉子一張あり。

③ 「詩經小識初稿目録」

④ 「詩經小識卷之一」（低二格）草屬畧第一／苻（隔二格）不

聞俗名／（以下底一格）一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水」引書ことに改行。墨付き全七十八張、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十一行二十字、字面高さ約二三・五種。

⑦卷八後、宝永六年若水跋、附録「羅木」あり。

⑨巻首に「荃汀／圖書」方形陽刻朱印記（河野通之）あり。

⑩河野通之（一八四二—一九一六）は字子明、号荃汀、明治から大正期の漢学者。

「菝」（1—50）の按語を欠く。

次にマイクロフィルム等画像でのみ確認した伝本について示す。

○陽明文庫（シ―二五、斯道文庫所蔵マイクロフィルムA一九

九二B）

詩經小識八卷

和大一冊

稲（生若水）（義）撰

〔江戸中期〕寫（近衛家照）

①代赭色椿文艶出表紙（二六・六×一七・九種）、左肩打付にて「詩經小識錄〈全〉」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低一格）草屬略卷一／苻 不聞俗名／（以

下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」引書ことに改行。墨付き全八十三張、一筆。

⑤淡墨刷罫紙、四周单边（二一・六×一四・五種）、有界、每半葉十行、行二十一字書写、版心白口双黒魚尾。

⑦卷八後、改張して宝永六年若水跋、さらに改張して附録「羅木」あり。

⑨印記・見返しに「陽／明／藏」陽刻方形印記あり。

○東北大大学附属図書館 狩野文庫（二―一七八〇―一、狩野文庫マイクロ版集成）

詩經小識八卷

一冊

稲（生若水）（義）撰

狩野亨吉舊藏

①外題打付にて「〔稲若水申筆本〕／詩經小識」と墨書。

③「詩經小識初稿目録」

④「詩經小識卷一／（低二格）草屬畧第一／苻／（低二格）不聞俗名／（隔三行、以下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正

圓徑寸餘浮在水上」、卷一は間々俗名と引用の間を数行空ける。引書ことに改行、按語はさらに一格低す。全九十五張（巻四

の第十一張と第十二張を錯綴、一筆。

⑤無辺無界、每半葉十行二十一字。

⑦卷八後、改張して附録「羅木」、さらに改張して宝永六年若水跋あり。

⑧後見返しに「翁□園主人轉録」識語あり。

⑨冊首に印文不明瓢箪型陽刻小型印記、「狩野氏圖書記」双辺楷書陽刻長方形印記あり。末尾識語に印文不明陽刻方形印記、「踏雪／尋梅」陰刻方形印記あり。

○多和文庫（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム二七一—四二—三

詩經小識八卷

二冊

稲（生若水）（宣義）撰

江戸中期寫 寛保二年（二七四二）王崧維嶽校閱

①外題不明（題簽剝離）。

②首冊見返し「治世能臣勳未成文章煥發照江城／分身一牀應誰望羨殺磷々白石生／（低一格）〈本朝嘗曰、孤與君美蓋佛説。所謂一牀分身也。取／以為詩料云。〉」と記す。また首冊後見返し「大東産物正名十七卷／「華陽汪維嶽著」と記す。

③宝永六年若水跋、「詩經小識目次」あり。

④「詩經小識卷二／（低二格）草屬略第一（隔四格）平安

稲宣義義信纂輯／江陵 王崧維嶽氏校閱／苻／（低二格）不聞俗名（禿烏客滅那隔又密）／（隔四行、以下低一格）苻一名接余白莖葉紫赤色正圓徑寸餘浮在水上」、卷一は間々俗名と引用の間を数行空ける。引書ごとに改行、按語はさらに一格低す。墨付き（第一冊）五十七張、（第二冊）三十八張（巻四の第十一張と第十二張を錯綴、一筆。

⑤無辺無界、每半葉九行二十一字。

⑦卷八後、改張して附録「羅木」あり。

⑧大尾に「寛保壬戌春二月既望／（低四格）江陵後學王崧維嶽閱／一字無訛」と記す。

⑨書入…間々俗名に読み仮名、眉上に音注、句点・校注あり。

印記…每冊首に「香木舎文庫」双辺陽刻長方形印記、「多和／文庫」方形陽刻印記、「集古／清玩」方形陽刻印記あり。

⑩「蓬」（1—29）の引書名「朱文公集傳」を「朱熹集傳」に作る。「芭」（2—8）の項目名を「邑」に作る。「藍」（2—18）の項目名を欠く。「扶蘇」（3—27）を「技蘇」に作る。「燕」（4—6）の引書名「清陳漢子秘傳花鏡」を「清陳漢子

秘傳説鏡」に作る。「鷹」(4-8)を「鷹」に作る。

三、共通する異同

以上の伝本について調査する過程で、複数の伝本の間に共通する異同が認められた。次に、その異同について整理していきたい。本稿では、各伝本の大枠を把握することに努め、引用文や按語本文の逐字的な異同について列挙することはせず、序跋の構成や項目そのものの脱落、引用の増減、順序などに限ることとした。各項目の引書の詳細は末尾【表1】を参照されたい。

(一) 前附の有無と後附の順序

① 目録の有無

本書には「詩経小識初稿目録」と題した目録を有するものとそうでない伝本があるが、現時点で目録の有無による伝本系統の違いは見出せない。

○目録あり

京大谷村A・同谷村B・同人文研・国会B・同C・同D
〔詩経小識叙目〕・内閣・東洋・慶大・岩瀬・内藤A・東

大B・陽明・東北大狩野・多和〔詩経小識目次〕本
○目録なし

京大若水遺稿・国会A・同E・都立中央・内藤B・研医会
(各巻の細目あり)・東大A本

② 附録と跋の前後関係

○附録+跋文

京大若水遺稿・同谷村A・同谷村B・同人文研・国会B・
同C・同D・内閣・東洋・都立中央・岩瀬・内藤A・研医
会・東北大狩野本

○跋文+附録

国会A・同E・慶大・内藤B・東大A・同B・陽明本

(二) 内容構成の異同

① 「苻」(1-1)の俗名

ほとんどの伝本が冒頭「苻」の俗名を「不聞俗名」とする中で、国会E本は「俟索索」(アサザ)と明記している。国会E本以外では、内閣本が「俟索索」と小字で注記しており、おそらく国会Eと同系の伝本によって校合したものと考えられる。

「苻」について、平安中期の『倭名類聚抄』では「阿佐々」

と当て、鎌倉時代の『本草色葉抄』（室町頃写、内閣文庫、特一一一四）では、「蒼菜」に「アサ、」と傍書し、「苳菜（同上）」という。江戸時代に入り、林羅山の『多識編』でも「蒼」を「阿左左」と訓じている。「蒼」は『本草綱目』で李時珍が「詩經作苳、俗呼苳絲菜」と述べるなど「苳」と同物とされており、若水編『庶物類纂』でも「蒼」の項で「苳」について論じているが、俗名については言及がなく、『新校正本草綱目』では「蕒」に「アサ、」と和名を付している。これら若水の態度からすれば、国会E本と内閣本の俗名は後人による改変と見るのが妥当であろうか。

若水と同時代を生きた貝原益軒（二六三〇—一七一四）は、『大和本草』において「苳」を「關雉ノ詩ニ詠セル苳菜是ナリ。又蒼ト云」とし、さらに「苳菜ヲアサト訓スルハ誤ナルヘシ。アサハカハホネニ似タル水草ナリ。アサハ根アラハル、苳菜ハ根アラハレス蕒菜ニ似タリ」と考証している。また、若水の弟子の松岡玄達は『用葉須知』の「萍蓬艸」の解説で「和名河骨……備醫誤テ苳菜トスルハ誤ナリ。苳菜ハ苳菜ノ別名ナリ。與此不同」としていることなどを踏まえると、当時「苳（蒼）」の和名の同定には諸説あったと想像される。¹²

②「蕒」（1—44）

京大谷村A・同谷村B・岩瀬本は、爾雅註の次に「李巡曰別二名郭云如續断寸々有節不可食也幽州人……」とし、これを陸疏からの引用とする。しかし、実際は「李巡曰別二名郭云如續断寸々有節」までは爾雅疏の引用で、「不可食也」以下は「蕒」（1—47）の陸疏であることが分かる。そして「稻」（1—45）・「梁」（1—46）・「蕒」が脱落して「苦」（1—48）に続くことから、底本に一張分脱落があり、それをそのまま転写したと考えられる。

③「藍」（2—18）

京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本はこの項目を欠く。

④「來牟」（2—28）以下四項目の配置

卷二の末尾「來牟」・「稌」（2—29）・「蓼」（2—30）・「苳」（2—31）について、国会B・同C・同D・都立中央本は卷一の尾に配す。本書の排列は『詩経』に登場する順番で並んでおり、「來牟」・「稌」・「蓼」は周頌、「苳」は魯頌に見える。このことからすれば、卷二の末尾に配置するのが適切であろう。

⑤「樸椒」（3—5）

京大人文研・都立中央本は重修鎮江府志からの引用を欠く。

⑥ 「木瓜」(3-20)

国会B・同C・都立中央・東大A本は按語を欠く。

⑦ 「楊」(3-36)・「條」(3-37)

この二項目について、京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大B本では「梅」(3-38)の後ろに配し、「楊」には「白(舊)¹³有梅上」、「條」には「同上」と注記する。

⑧ 「櫟」(3-39)の孔穎達疏

若水遺稿本では「櫟」について陸疏を引用するにとどまるが、それ以外の伝本では全て陸疏の次に孔穎達毛詩疏からの引用「説者或曰柞櫟或曰木蓼璣以爲此秦詩也宜從其方土之言柞櫟是也」を付加している。

⑨ 「鴛鴦」(4-32)

京大谷村・同谷村B・岩瀬本は按語を欠く。

⑩ 「鶴」(4-33)

京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医学会・東大B・陽明本は嚴粲詩緝の「四足之美有」から後ろを欠き、改行せずそのまま次の毛晋広要の冒頭「嚴氏詩緝引」に接続する。おそらく、底本一行あるいは二行文の脱落があったのではないかと想像される。

研医学会本は、眉上に墨筆にて「珍按此條有脱／文乎不可讀」と注し、その隣に朱筆にて脱文を補う。

⑪ 「蛇」(7-16)

京大谷村A・谷村B・岩瀬・東大B本はこの項目を欠く。

⑫ 「碩鼠」(8-3)

国会C・同D・都立中央本は鄭箋を欠く。

(三) 按語の配置

若水の按語は概ね各項目の末尾につくが、いくつかの項目では引用の合間に挟まる場合があり、次の項目ではその配置が伝本によって異なる。

① 「勺藥」(1-41)

研医学会本は先頭に按語を配し、京大谷村A・同谷村B・国会A・岩瀬・内藤A・内藤B・東大A・同B本は呂東萊詩記の前に配す。

② 「鬯」(2-27)

若水遺稿・国会D本を除く諸本が爾雅翼の前に按語を配す。

③ 「駮」(3-46)

若水遺稿・国会D本を除く諸本が五雜俎の前に按語を配す。

④「杵」(3-18)

若水遺稿・国会D本を除く諸本が嘉祐註本草の前に按語を配す。

(四) 項名表記

①「莽苳」(1-5)

京大谷村A・同谷村B本は「莽苳」に作り、国会C・同D・都立中央・京大人文研本以外は「莽苳」に作る。

②「芩」(1-19)

京大人文研・都立中央本は「芩」に作る。

③「艾」(1-34)

京大人文研・国会C・都立中央本は項名を欠く。

④「麝」(4-29)

京大谷村A・同谷村B・岩瀬本は「麝」に作る。

⑤「獼歌驕」(5-20)

京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B本は「獼／歌驕」と、二物として表記する。毛伝に「長喙曰獼、短喙曰歌驕」とあることからすれば、「獼」と「歌驕」を分けて表記するのも頷ける。

⑥「鼈」(6-15)

国会C・都立中央本は項名を欠く。

⑦「蝨斯」(7-1)

京大人文研・国会C・同D・東洋・都立中央本は「蝨」のみ。

(五) 引書名の誤脱

①「藥」(1-7)の本草図経

京大人文研・国会C・都立中央本は「本草真經」に作る。

②「蕘」(1-20)・「鬯」(2-27)の毛伝

京大人文研・国会C・都立中央本は引書名を欠く。

③「著」(1-58)の留青日札

国会C・都立中央本は「留青日記」に作る。

④「奠」(1-61)の毛伝

京大谷村A・同谷村B・東洋・研医会・東北大狩野・多和本は書名を欠く。研医会本は朱筆で書名を補う。

⑤「桐」(3-14)の本草綱目

国会C・都立中央本は引書名を欠く。

⑥「木瓜」(3-20)の致富全書

京大人文研・国会C・都立中央本は「致富奇書」に作り、人文研は「奇書一作全書」と注記す。『致富奇書』とは陶朱公(范

蠹)に仮託された農書である。また陶朱公撰とされる書物には『致富全書』という同名の書物もあるため、明周文華の『致富全書』とこれらを混同したか。¹⁴⁾

⑦「舜」(3-26)の致富全書

京大人文研・都立中央本では同書を「明周文華致富貴書」に作り、京大人文研本は「貴書(貴一作全)」と注記する。

⑧「梅」(3-38)の明毛晋陸瓊廣要

京大谷村A・同谷村B・国会A・同E・東洋・慶大・岩瀬・陽明・東北大狩野・多和本は「陸疏廣畧」に作る。

⑨「黄鳥」(4-2)の陸疏廣要

京大人文研・国会C・同D・都立中央本は書名を欠き、国会D本は朱筆で「闕」と記す。

⑩「鳩」(4-4)の詩經説約

京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大B・陽明・多和本は二つ目の詩經説約に「同上」を欠く。

⑪「鳴鳩」(4-27)の詩經集伝

京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本は「詩經集註」に作り、研医会本は「註一本作傳」と注記する。

⑫「鷺」(4-34)の本草綱目

京大人文研・国会C・同D・都立中央本は書名を欠き、国会Dは朱筆で「闕」と記す。

⑬「流離」(8-1)の詩經集伝

京大人文研・国会C・同D・都立中央本は書名を欠き、京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本は「詩經集註」に作る。

四. 整理

以上のように共通する異同を列挙してみると、おぼろげながらも各伝本に一定のまとまりが見えてくるのではないだろうか。

(二) 京大谷村A・同谷村B・岩瀬・研医会・東大B・陽明本
これらのうち、京大谷村A・同谷村B・岩瀬・東大Bは「養」(1-44)や「鷓」(4-33)の脱文、「藍」(2-18)の脱落、「梅」(3-38)・「楊」(3-36)・「條」(3-37)の順序など、共通する異同が多く、同系の底本を写したものと考えられる。

特に岩瀬・谷村A・谷村B本は書写年代が明確で、上述したように岩瀬本は儒医の山本封山が寛政六年(一七九四)に写し

たものである。この時、封山は山本読書室を開いて多くの学生を教えており、その中でさらに転写されていた可能性も考えられよう。そこで、山本読書室の門人名簿を参照すると、¹⁵ 文政三年（一八二〇）三月に雨森良意の紹介で加賀・金沢から内山覚順という人物が入門している。文政三年四月の書写識語がある谷村A本には「内山」の蔵書印が捺されており、その上部にやはり金沢の儒者・金子家の蔵書印があることからすれば、谷村A本の「内山」はこの人物かもしれない。¹⁶ 岩瀬本と谷村A本は行字数を同じくし、書きぶりもよく似ている。そして、谷村B本は文政六年（一八二三）の識語を有し、谷村A本と書写年代が近く、異同がほぼ一致することから、これらは非常に近い関係にあったことがうかがえる。¹⁷

また、陽明本は「鶴」の脱文や「鳴鳩」と「流離」の詩経集伝を「集註」に作る点は岩瀬本や谷村A・谷村B本と共通しているが、「養」の脱文や「藍」の脱落、「梅」の順序の混乱は見られない。陽明本は近衛家熙（一六六七―一七三六）の筆とされ、たとすれば本書が成って比較的早い時期に書写された伝本といえる。岩瀬・谷村本と共通点を持ちつつ、「藍」の脱落や「養」の脱文等が見られないということは、陽明本の系

統からさらに分岐して岩瀬・谷村本につながる伝本が存在したと考えられよう。

そして文化九年（一八〇八）に写された研医学会本は、「藍」の脱落や「鶴」の脱文、「鳴鳩」と「流離」の「集註」は共通しているが、「養」の脱文や「梅」などの順序の混乱は見られず、この群の中では陽明本に近い。さらに、研医学会本は全体に他本と綿密な校合を行っており、「鶴」の脱文は朱筆で補われているものの「藍」や「集註」には注を附していない。これは校合本にもこれらの異同があったことを意味していよう。この点からも、この一群の伝本にはさらにバリエーションがあったことがうかがえる。

（二）京大人文研・国会B・同C・同D・都立中央本

もう一つのまとまりを見せるのが、京大人文研・国会B・同C・同D・都立中央本である。これらは「來牟」（2128）以下四項目を巻一の末尾に配す点で共通しており、この中でも特に京大人文研・国会C・都立中央本は引書名の異同に加えて、巻八の尾題が巻尾だけでなく附録と跋文の間に重複して現れる点でも共通している。しかし、今のところこれらの間にいか

なる関係があるのかは解明できていない。¹⁸ 人文研本は「木瓜」(3-20)の致富全書を「致富奇書」に作っていることに対して「奇書一作全書」と注すなど、他本と校合した痕跡が見られる。

国会B本は前橋藩儒の関松窓が天明八年(一七八八)に校閲したことが記されており、書写も同時期であろう。「來牟」以下四項目の配置と「木瓜」の按語を欠く点では共通しているが、その他の引書名の誤脱は見られない。

また、国会D本は「來牟」以下四項目の配置はこれらと共通するものの、「鬮」(2-27)や「駁」(3-46)などの按語の配置については若水遺稿本に近い。

(三) 若水遺稿と諸伝本

始めに述べたように、京都大学附属図書館所蔵の若水遺稿本は稲生若水自筆とされ、縁者の雨森家から寄贈された伝本で、後人の書入が見られるものの、各伝本を比較する際に基準に定めた伝本である。しかし、調査が進むにつれて、この若水遺稿本にのみ見られる特徴があることが分かってきた。

①「荏菹」(2-22)の引書名を「毛詩傳」とする

若水遺稿本は引書名を「毛詩傳」とするが、実際は孔穎達疏

からの引用である。おそらく若水遺稿本の誤記であろうが、国会D本がこれを陸疏とする他は全て正しく孔穎達毛詩疏とする。

また、引書名の表記については、【表1】に示したように、若水遺稿本は初出こそ「明王蓋臣群芳譜」と年代・著者名・書名を備えるが、以降は「群芳譜」などと年代と著者名が省略される場合が多い。「本草綱目」を「明李東璧本草綱目」と表記するのは「鱒」(6-7)と「鱧」(6-10)の二例のみである。これに対して、その他の伝本では「明李東璧本草綱目」と繰り返し表記される場合が多い。¹⁹

②「櫟」(3-39)の孔穎達疏を欠く

諸本は「櫟」について陸疏と秦風・晨風「山有苞櫟」の孔疏「說者或曰柞、櫟或曰木蓼、璣以爲此秦詩也、宜從其方土之言、柞櫟是也」を引くが、若水遺稿本は孔疏を欠く。

その他、「鬮」・「駁」・「柞」の按語の配置が国会Dを除く諸本と異なることは先に述べた。

これらの異同をどのように考えたらよいだろうか。①「毛詩傳」は若水遺稿本の誤記であったとしても、他本では誤った引書名がそのまま写されている例が多く見られるため、もし該本

が祖本として伝写されていたのであれば、この誤りもそのまま写されていたらう。しかし、今のところこの誤記を引き継いでいる伝本は見られない。これらの違いを踏まえると、若水遺稿本は自筆本ながら諸伝本とは別系統にあり、諸本につながる祖本は別にあつた可能性を考えざるをえない。そして半数以上の伝本が有する「詩經小識初稿目録」の「初稿」が意味するものと、この目録が該本には備わっていない点も含めて、今後の検討課題である。

小結

以上、今回調査できた十九点の伝本について、その異同と系統について検討した。このうち、国会E本と内閣本は乱張のある底本をそのまま転写したと見え、内容が大きく乱れているため、用いる際には注意が必要である。そして各伝本の関係について、現時点での見通しを述べれば次のようになる。

まず、京大谷村A・谷村B・岩瀬本が非常に近い関係にあり、岩瀬本は山本封山の識語を有することから、山本読書室を中心にこれが転写されたものではないかと考えられる。東大B・研

医会・陽明本は、岩瀬・谷村本ほど密接ではないが、詩經集伝を「集註」に作るなど、これらと共通した異同を持つため、祖本を同じくするものと考えられよう。

もう一つのまとまりは、「來牟」以下四項目を巻一の末尾に配す京大人文研・国会B・同C・同D・都立中央本である。特に、京大人文研・国会C・都立中央本は共通点が多く、近い関係にあつたものと想像されるが、現時点ではどのような関係にあつたか明らかにできていない。

また、本稿で比較の基準とした若水遺稿本にも独自の異同が見られた。これについて、該本は若水の自筆としても、諸本の祖本とはいえないのではないかと可能性を提示したが、それを明らかにするためには今後さらなる調査を要する。

現在、目録等で所蔵が確認される伝本は以下の通りである。

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻司書室（和15470）
一三）

（東京大学理学図書館（Wa16118）

富山大学医薬学図書館特殊資料室（K362）

島根大学附属図書館（九二一・三二一I五五）

筑波大学附属図書館 林文庫（ロ八二〇―三六）

東北大学附属図書館 狩野文庫（二一―七八〇―一）

茨城大学附属図書館 菅文庫（一八一―四）

県立長野図書館（信濃図書館）（四九九―一二七）

杏雨書屋（杏三六三〇）

同（杏五二八三）

同（杏五二八四）

無窮会 織田文庫（オ三七〇）

同 織田文庫（オ三七一）

同 神習文庫（八四一―三井）

同 平沼文庫（八八八―三）

このうち、杏雨書屋所蔵の杏五二八四は、巻一から三を欠くものの自筆稿本とされている。この他にも巷間に散じている伝本が多数存在すると考えられる。可能な限りそれらも吸収し、さらに調査を進めることで、『詩経小識』のテキストの復元だけでなく、伝写とそれによる人的ネットワークなど、江戸中期以降の名物学のあり方が見えてくるのではなからうか。

注

1 本書に関する論考には村山吉廣「詩経関係書目解題（三）」

（『詩経研究』第七号、一九八二年）、陳捷「経学註釈と博

物学の間―江戸時代の『詩経』名物学について」（同氏編『医

学・科学・博学―東アジア古典籍の世界』勉誠出版、二〇

二〇年）がある。

2 村山氏前掲論文。

3 杉立義一「稻生恒軒・若水の墓碑銘について」（『東アジア

の本草と博物学の世界』下巻、思文閣出版、一九九五年）

によると、稻生恒軒・若水父子ら稻生家の墓は京都迎称寺

の雨森一族の墓地にあり、稻生家の過去帳は北雨森家の部

に記載されているという。

4 一九九二年、迎称寺の稻生恒軒・若水の墓の下から銅板の

墓誌が発見されている。若水の墓誌は弟子の松岡玄達が撰

じたもので、若水の学問への姿勢を「不慕粉華、常従洛陽

名儒、講論道学、遂厭詞章之習、而有志于實用」と評して

いる。（杉立氏前掲論文）。その他、若水の経歴や学問的特

徴については、東条耕子蔵他『先哲叢談続篇』（国史研究会、

一九一六）、森銚三著・小出昌洋編『新編おらんだ正月』（岩

- 波書店、二〇〇三年、五八一―六四頁、原本は富山房、一九三八年）、吉田光邦『江戸の科学者』（講談社、二〇〇二年、四六一―五〇頁、原本は社会思想社、一九六九年）、太田由佳『松岡恕庵本草学の研究』（思文閣出版、二〇一二年）、謝蘇杭「近世前期本草学における実学思想の考察―稲生若水と貝原益軒を例に」（千葉大学人文公共学研究論集）第三八号、二〇一九年）等がある。
- 5 松村明校注『折たく柴の記』（岩波書店、一九九九年、九七―九八頁）に拠った。
- 6 『新井白石全集』第五卷所収「白石先生手簡」（国書刊行会、一九七二年）に拠った。
- 7 この絵図は現在宮内庁書陵部に所蔵されており、袋綴の絵目一冊・折帖の図譜五帖からなる、精緻で極彩色の非常に美しい大型本である（新井白石校・狩野春湖筆『詩経図譜』、秘閣本、四五〇―七）。『詩経図』については、村山吉廣「詩経関係書目解題（二）―新井白石校・狩野春湖筆『詩経図』について」（『詩経研究』第六号、一九八一年）、原田信「新井白石『詩経図』について―その編纂経緯と名物考証」（早稲田大学中国古籍文化研究所編『中国古籍文化研究―稲畑
- 8 耕一郎教授退休記念論集『東方書店、二〇一八年』に詳しい。原田氏前掲論文。
- 9 村山氏前掲論文（一九八二年）。
- 10 遠藤正治編『読書室二〇〇年史』（山本読書堂、一九八一年、二頁）によれば、封山の読書法は写本にあり「読は書を写すに如かず」として写本に専心したという。
- 11 松田清『京の学塾 山本読書室の世界』（京都新聞出版センター、二〇一九年、一五九―一六〇頁）。
- 12 さらに、松岡玄達の弟子の江村如圭が撰した『詩経名物弁解』では、「苳」の和名を「アサ、」とし、「蔡元度カ名物解ニ苳・蓴ヲ混説ス。大二誤ル。宜ク辨別スヘシ。アサ、ノ名其來ルコト久シ。新撰六帖ノ歌ニ水マサル沼ノアサ、ノウキテノミアルハアリトモ無キ我身カナト此苳ヲ詠スルナリ〇凡和漢物ノ名クルニ正名俗名アリ。……學者其名ノ正カラシコトヲ欲ス。宜ク分辨ヲ加ヘヨ。而先輩漢名ヲ正名トシ和名ヲ俗名トスルハ深考ザルニ失ス。正俗ハ和漢共ニ各、識別スヘシ。此格知之一端、辨物之大段ナリ」と述べる。
- 13 東大B本は「田」に作るが、「旧」の誤写であろう。

14 周文華の『致富全書』は、『四庫全書存目叢書』には『汝南圃史』の名で収録されている。

15 遠藤正治・松田清・益満まを「山本読書室門人名簿の分析と紹介」(『近世京都』第一号、二〇一四年) 参照。

16 遠藤氏等前掲論文の略歴によれば、小野蘭山の門人で加賀藩医の内山覚仲の子か、稲生若水の末子で内山覚仲の養子になった内山覚順の末裔かという。加藤豊明「内山覚順覚仲」と稲生宣義(若水)「『北陸医史』第四卷第一号、一九八二年」によると、若水の門人の内山覚順(?-一七四二)は若水の死後、名を覚仲と改め、若水の長男・新助(孝興)等と『庶物類纂』編纂を続行した。覚仲は若水の次男・義泰(藍浦、?-一七八三)を養子に迎えており、義泰は名を覚順として後を継いだ。二代目の覚順は養福(?-一八〇一)を養子とし、養福の後嗣がまた名を覚仲(覚中)と名のつた。覚仲は文政三年四月に公事場で詮議され、十二月には能登島へ流刑になったという。これはちょうど谷村B本が書写された時期である。山本読書室に入門したのはこの縁者であろう。

17 谷村B本の書写者「春水」については不明ながら、京都大

学附属図書館富士川文庫(シ-二〇七)の稲生若水「食物伝信纂」に「文政六年十月廿八日/日本後學/稻春水」という識語があり、稲氏に春水という人物がいたことが分かる。ただし、谷村B本とは筆跡が異なるように見受けられる。

18 国会C本は享和二年(一八〇二)「桃花源」の識語を有すが、罫紙の版心にある「龍珠館」とともに不明。「龍珠館」は筑波大学図書館所蔵本(口八二〇-三六)の巻末に「寛政四年 龍珠館藏」とあるようだが未見。また、都立中央本は巻三の第六張に「温故齋藏」とある罫紙が用いられている。温故齋といえ、水戸藩に仕えた本草学者・佐藤中陵(一七六一-一八四八)が想起されるが、水戸市立図書館所蔵中陵自筆『山海庶本』と比較すると筆跡が異なるように思われる。前注の春水と合わせて、これらについては今後の課題である。

19 研医学会本では「陸環疏」や「陸疏広要」などの省略が見られるが、若水遺稿本とは一致しない。国会A・内藤B本も同様。また、陽明本や東大B本は「唐陸……」
「疏」のように省略している。

〔附記〕

本稿は日本学術振興会科学研究費基金（若手研究）「狩野文庫本『毛詩草木鳥獸虫魚疏』における書入れの翻刻と研究」一九K一三〇六一の成果の一部である。

貴重な原本の調査を許可してくださった諸機関に感謝申し上げます。

【表1】『詩經小識』収録項目・引書一覧 ※引書名の表記は若水遺稿本に従った。

	卷次	項目名	引書
1-1	卷一	苻	不聞俗名
1-2		葛	(俗名)
1-3		卷耳	(俗名)
1-4		藟	未詳
1-5		芣苢	(俗名)
1-6		蕪	(俗名)
1-7		藜	(俗名)
1-8		蕨	(俗名)
1-9		薇	(俗名)
1-10		蘋	
1-11		藻	(俗名)
1-12		白茅	(俗名)
1-13		葭	(俗名)
1-14		匏	(俗名)
1-15		葍	(俗名)
1-16		菲	未詳
1-17		茶	(俗名)
1-18		薺	(俗名)
1-19		苓	未詳
1-20		藎	
1-21		茨	不聞俗名
1-22		唐	(俗名)
1-23		麥	(俗名)
1-24		蟲	未詳
1-25		瓠	見匏條
1-26		葵	(俗名) 見葭條
1-27		芄蘭	(俗名)
1-28		葦	見葭條
1-29		蓬	不聞俗名
1-30		黍	(俗名)
1-31		稷	(俗名)
1-32		蕓	(俗名)
1-33		蕭	(俗名)
1-34		艾	(俗名)
1-35		麻	(俗名)
1-36		荷華	(俗名)
1-37		龍	(俗名)

	卷次	項目名	引書
1-38		茹蘆 (俗名)	
1-39		茶 (俗名)	鄭箋／孔穎達毛詩疏
1-40		藟 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
1-41		勺藥	毛傳／孔穎達毛詩疏／宋羅願爾雅翼／宋呂東萊讀詩記／按
1-42		莠 (俗名)	羅願爾雅翼／本草綱目／同上(本草綱目)／按
1-43		莫 未詳	
1-44		蕒 (俗名)	爾雅註／爾雅疏／鄭夾漈爾雅註／嚴粲詩緝／按
1-45		稻	埤雅
1-46		梁	本草綱目
1-47		蕨 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晉陸疏廣要
1-48		苦 見前茶	
1-49		藜藿 見前	陸疏廣要
1-50		莢 (俗名)	群芳譜／按
1-51		紵 (俗名)	
1-52		菅 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
1-53		苕 不聞俗名	同上(毛詩草木鳥獸蟲魚疏)
1-54		鷓 (俗名)	爾雅註／毛詩草木鳥獸蟲魚疏
1-55		蒲 (俗名)	本草綱目
1-56		蓂楚 未詳	
1-57		稂 未詳	按
1-58		著	本草圖經／明田藝蘅留青日札／按
1-59		萑葦 見葦條	
1-60		萋	詩緝／按
1-61		蕝 (俗名)	毛傳
1-62		葵 不聞俗名	本草綱目／按
1-63		菽 (俗名)	汀洲府志
1-64		瓜 (俗名)	
1-65		壺	毛傳
1-66		苴	毛傳
1-67		韭 (俗名)	
1-68		茶	毛傳／毛詩疏
1-69		果羸 (俗名)	毛傳
2-1	卷二	萃 未詳	
2-2		蒿 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／夢溪筆談
2-3		芩 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-4		甘瓠	呂東萊讀詩記
2-5		臺 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-6		萊 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晉陸疏廣要／本草綱目
2-7		莠 未詳	
2-8		芑 (俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
2-9		粟 (俗名)	

	卷次	項目名		引書
2-10		蓬	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
2-11		菑	(俗名)	明周憲王救荒本草
2-12		莞	(俗名)	鄭箋／按
2-13		蔚	未詳	
2-14		稂	未詳	爾雅翼／按
2-15		女蘿	不聞俗名	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
2-16		芹	(俗名)	
2-17		綠	(俗名)	爾雅／爾雅註／嘉祐補註本草
2-18		藍	(俗名)	
2-19		白華菅		毛傳／本草綱目
2-20		瓜瓞		鄭箋／毛詩疏／按
2-21		董	(俗名)	毛傳／詩經說約
2-22		桂菽		毛詩傳 (孔穎達疏)
2-23		柜		
2-24		秬		爾雅疏
2-25		糜		
2-26		芑		同上 (爾雅疏)
2-27		鬯		毛傳／毛詩疏／宋鄭夾溱昆蟲草木畧／爾雅翼／按
2-28		來牟		陸德明詩釋文
2-29		稌		毛傳
2-30		藜	(俗名)	
2-31		茆		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
3-1	卷三	桃	(俗名)	
3-2		楚	未詳	
3-3		甘棠	(俗名)	唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏／毛詩集解／按
3-4		梅	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-5		檿楸	(俗名)	毛詩疏／本草綱目／重修鎮江府志
3-6		唐棣	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋嚴粲詩緝／明周文華致富全書／漳州府志／邵武府志
3-7		李	(俗名)	
3-8		柏	(俗名)	
3-9		棘		詩緝
3-10		桑	(俗名)	
3-11		榛	(俗名)	
3-12		栗	(俗名)	
3-13		椅	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-14		桐	(俗名)	本草圖經／本草綱目／宋陳翥桐譜
3-15		梓	(俗名)	鄭夾溱昆蟲草木畧／按
3-16		漆	(俗名)	
3-17		竹	(俗名)	毛詩集解
3-18		檜	(俗名)	本草綱目／爾雅翼／按

	卷次	項目名		引書
3-19		松	(俗名)	
3-20		木瓜		明周文華致富全書／本草綱目／按
3-21		木桃	未詳	
3-22		木李	(俗名)	明吳元化毛詩鳥獸草木攷
3-23		蒲		詩緝／毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
3-24		杞	(俗名)	同上(毛詩草木鳥獸蟲魚疏)
3-25		檀	不聞俗名	救荒本草／本草綱目
3-26		舜	(俗名)	致富全書／興化府志／按
3-27		扶蘇	未詳	毛傳／唐孔穎達毛詩疏
3-28		柳	(俗名)	
3-29		樞	未詳	
3-30		榆	(俗名)	
3-31		栲	未詳	
3-32		杻	未詳	
3-33		椒	(俗名)	
3-34		杜	見甘棠條	爾雅／天台山方外志
3-35		栩	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
3-36		楊	見蒲條	
3-37		條	未詳	
3-38		梅	未詳	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／明毛晉陸疏廣要／詩經說約
3-39		櫟	見栩條	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／(孔穎達疏)
3-40		苞棣		毛詩集解
3-41		榘		毛詩疏
3-42		枌		爾雅註
3-43		鬱	未詳	
3-44		棗	(俗名)	
3-45		檇	未詳	
3-46		駁	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋沈存中補筆談／明謝肇淛五雜俎／按
3-47		杞		詩緝／本草圖經
3-48		常棣	未詳	
3-49		楊柳		毛傳／嘉祐補註本草／本草圖經／按
3-50		杞	未詳	詩經說約
3-51		枸	(俗名)	本草圖經／本草綱目
3-52		楛	未詳	
3-53		杞棘	未詳	詩經說約／按
3-54		穀	(俗名)	
3-55		楛	未詳	
3-56		蔦	(俗名)	爾雅疏
3-57		苕	(俗名)	本草圖經／宋寇宗奭本草衍義／宋羅願爾雅翼／詩經說約／按
3-58		柞	(俗名)	毛詩疏／嘉祐補註本草／本草綱目／按
3-59		棧	未詳	

	卷次	項目名		引書
3-60		楛	未詳	
3-61		檉	(俗名)	昆蟲草木畧／本草綱目／按
3-62		楛	未詳	
3-63		檉	未詳	
3-64		柘	未詳	
3-65		梧桐	(俗名)	按
4-1	卷四	睢鳩	(俗名)	郭璞爾雅註／毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋歐陽公詩本義／明沈萬鈞詩經類考／按
4-2		黃鳥		宋鄭夾漈爾雅註／本草綱目／陸疏廣要／按
4-3		鵲	(俗名)	本草綱目／按
4-4		鳩		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／歐陽公詩本義／詩經說約／同上(詩經說約)
4-5		雀	(俗名)	
4-6		燕	(俗名)	嘉祐補註本草／清陳漢子秘傳花鏡／按
4-7		雉	(俗名)	按
4-8		鴈		唐顏師古急就篇註／嘉祐補註本草／按
4-9		烏	(俗名)	
4-10		鴻	(俗名)	按
4-11		鶉	(俗名)	
4-12		雞	(俗名)	
4-13		鳧	(俗名)	按
4-14		鴝	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／埤雅／明吳元化毛詩鳥獸草木攷
4-15		晨風	(俗名)	毛詩疏
4-16		鴝	(俗名)	爾雅疏／本草綱目
4-17		鳴鳩	未詳	
4-18		鴝	(俗名)	毛詩鳥獸草木攷
4-19		鴝	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋呂東萊讀詩記／按
4-20		鸛	(俗名)	
4-21		鸛	(俗名)	爾雅翼
4-22		脊令		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋嚴粲詩緝／按
4-23		鴻雁	見前	毛傳／毛詩疏／按
4-24		隼	未詳	
4-25		鶴	(俗名)	
4-26		翬	未詳	
4-27		鳴鳩		詩經集傳／按
4-28		桑扈	(俗名)	本草綱目／按
4-29		鸛	(俗名)	毛詩疏
4-30		鶉		清王夢伯詩經廣大全
4-31		鸛	(俗名)	埤雅／邵武府志／按
4-32		鴝		本草綱目／按
4-33		鸛	未詳	宋嚴粲詩緝／陸疏廣要

	卷次	項目名		引書
4-34		鷺	(俗名)	本草綱目
4-35		鷹	(俗名)	
4-36		鷺	(俗名)	
4-37		鳳凰	未詳	
4-38		梟		
4-39		鴟	(俗名)	鄭箋／詩緝／按
4-40		鷺	(俗名)	
4-41		桃蟲	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／詩緝／按
5-1	卷五	馬	(俗名)	
5-2		兕	未詳	
5-3		兔	(俗名)	晉張華博物志／清方以智通雅／清皖桐方氏物理小識
5-4		麟	未詳	
5-5		羔羊	(俗名)	毛傳
5-6		麇		本草圖經／按
5-7		鹿	(俗名)	
5-8		麕	(俗名)	詩緝
5-9		羆		詩緝
5-10		豸		同上(詩緝)
5-11		騶虞	未詳	
5-12		狐	(俗名)	
5-13		象	此方未有	
5-14		鼠	(俗名)	
5-15		牛	(俗名)	
5-16		虎	本邦未有此獸	
5-17		狼	(俗名)	
5-18		盧		毛傳／毛詩疏／本草綱目
5-19		貍		鄭箋
5-20		獫狁		毛傳／詩緝／按
5-21		貉	(俗名)	
5-22		狸	(俗名)	
5-23		豸		毛傳
5-24		魚		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
5-25		鷹		毛傳
5-26		熊	(俗名)	
5-27		羆		爾雅疏
5-28		豺	(俗名)	
5-29		獠	(俗名)	毛傳／毛詩疏／按
5-30		豕	(俗名)	
5-31		貓	未詳	毛傳／按
5-32		貔	未詳	
5-33		赤豹	未詳	

	卷次	項目名		引書
5-34		黃巖		毛詩疏
6-1	卷六	魴魚	未詳	
6-2		鱸	未詳	
6-3		鮪	未詳	
6-4		鰈	未詳	
6-5		鱖	未詳	
6-6		鯉	(俗名)	
6-7		鱒	(俗名)	詩緝／宋鄭夾漈爾雅註／明李東璧本草綱目／按
6-8		鱒		唐陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏／按
6-9		鯪	(俗名)	宋陸佃埤雅／按
6-10		鱧	(俗名)	明李東璧本草綱目／清王金孺詩經廣大全／寧波府志／按
6-11		鰻	(俗名)	
6-12		鼈	(俗名)	
6-13		龜	(俗名)	
6-14		貝	(俗名)	
6-15		鼈	未詳	
6-16		鱖	(俗名)	本草綱目／按
7-1	卷七	蝻斯	(俗名)	唐孔穎毛詩疏／宋歐陽公詩本義／宋邢昺爾雅疏／鄭夾漈爾雅註／清方以智通雅／按
7-2		草蟲	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-3		阜螽	(俗名)	唐陳藏器本草拾遺／按／宋歐陽公詩本義／按
7-4		蝻蟻		宋鄭夾漈爾雅註
7-5		螻		鄭箋／宋鄭夾漈爾雅註
7-6		蒼蠅	(俗名)	
7-7		蟋蟀	(俗名)	草木鳥獸蟲魚疏
7-8		蝻蟻	未聞俗名	明毛晉陸疏廣要／按
7-9		蝻	(俗名)	宋嚴粲詩緝／昆蟲草木畧
7-10		莎雞	(俗名)	毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋丘光庭兼明書／明顧夢麟詩經說約／清王夢白詩經廣大全
7-11		蝻		毛傳／毛詩疏
7-12		伊威		毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-13		蠨蛸		毛詩草木鳥獸蟲魚疏
7-14		熠燿	(俗名)	毛傳／毛詩疏／按
7-15		虺	(俗名)	
7-16		蛇	(俗名)	
7-17		蜴	(俗名)	
7-18		螟蛉 蝶蠟		毛詩草木鳥獸蟲魚疏／宋嚴粲詩緝
7-19		蚻	未詳	
7-20		螟		
7-21		螻		
7-22		蝻		

	卷次	項目名	引書
7-23		賊	毛傳／鄭夾漈爾雅註
7-24		青蠅 (俗名)	
7-25		蠶	本草綱目／同上 (本草綱目)
7-26		蟾	爾雅疏
7-27		蠶 (俗名)	
7-28		蜂 (俗名)	
8-1	卷八	流離	詩經集傳／按
8-2		諛草	唐孔穎達毛詩疏／宋羅願爾雅翼
8-3		碩鼠	鄭箋／按
8-4		宵行	唐孔穎達毛詩疏／按
8-5		嘉魚	鄭箋／宋嚴粲詩緝／按
	附録	羅木	宋周公謹癸辛雜識續集／按

【表2】若水遺稿本・国会E本・内閣本の配列対照表 (巻一・巻二)

若水遺稿		国会E		内閣文庫	
1-1	苻	I -1	苻	①-1	苻
1-2	葛	I -2	葛	①-2	葛
1-3	卷耳	I -3	卷耳	①-3	卷耳
1-4	藟	I -4	藟	①-4	藟
1-5	芣苢	I -5	芣苢	①-5	芣
1-6	萋	I -6	萋	①-6	萊
1-7	繁	I -7	繁	①-7	莪
1-8	蕨	I -8	蕨	①-8	芑
1-9	薇	I -9	薇	①-9	粟
1-10	蘋	I -10	蘋	①-10	蓬
1-11	藻	I -11	藻	①-11	苔 (芩)
1-12	白茅	I -12	白茅	①-12	甘瓠
1-13	葭	I -13	葭	①-13	臺
1-14	匏	I -14	匏	①-14	徐
1-15	葍	I -15	葍	①-15	蓼
1-16	菲	I -16	菲	①-16	茆
1-17	荼	I -17	莫	②-1	萃
1-18	薺	I -18	薺	②-2	蒿
1-19	苔	I -19	勺藥	②-3	菽
1-20	萹	I -20	萹	②-4	瓜
1-21	茨	I -21	茹蘆	②-5	壺
1-22	唐	I -22	茶	②-6	苴
1-23	麥	I -23	簡 (蒲)	②-7	韭
1-24	蟲	I -24	蕭	②-8	茶

若水遺稿		国会 E		内閣文庫	
1-25	瓠	I -25	艾	②-9	果羸
1-26	葵	I -26	麻	②-10	來牟
1-27	芃蘭	I -27	荷花	②-11	萑葦
1-28	葦	I -28	龍	②-12	蓼
1-29	蓬	I -29	黍	②-13	萸
1-30	黍	I -30	稷	②-14	葵
1-31	稷	I -31	菴	②-15	蓂楚
1-32	菴	I -32	麥	②-16	稂
1-33	蕭	I -33	蠃	②-17	著
1-34	艾	I -34	瓠	②-18	苳
1-35	麻	I -35	葵	②-19	紆
1-36	荷華	I -36	芃蘭	②-20	菅
1-37	龍	I -37	葦	②-21	苕
1-38	茹蘆	I -38	蓬	②-22	鷓
1-39	茶	I -39	萸	②-23	蒲
1-40	蒹	I -40	茨	②-24	稻
1-41	勺藥	I -41	唐	②-25	梁
1-42	莠	I -42	荼	②-26	藪
1-43	莫	I -43	濟	②-27	苦
1-44	蕒	I -44	苓	②-28	兼葭
1-45	稻	I -45	稻	②-29	莫
1-46	梁	I -46	梁	②-30	蕒
1-47	藪	I -47	藪	②-31	蒹
1-48	苦	I -48	苦	②-32	勺茱 (藥)
1-49	兼葭	I -49	兼葭	②-33	莠
1-50	苳	I -50	苳	②-34	麻
1-51	紆	I -51	紆	②-35	荷華
1-52	菅	I -52	菅	②-36	龍
1-53	苕	I -53	苕	②-37	茹蘆
1-54	鷓	I -54	鷓	②-38	茶
1-55	蒲	I -55	蒲	②-39	葦
1-56	蓂楚	I -56	蓂楚	②-40	蓬
1-57	稂	I -57	稂	②-41	黍
1-58	著	I -58	著	②-42	稷
1-59	萑葦	I -59	萑葦	②-43	菴
1-60	蓼	I -60	要 (蓼)	②-44	蕭
1-61	萸	I -61	萸	②-45	艾
1-62	葵	I -62	葵	②-46	萸
1-63	苳	I -63	苳	②-47	茨
1-64	瓜	I -64	瓜	②-48	唐

若水遺稿		国会 E		内閣文庫	
1-65	壺	I -65	壺	②-49	麥
1-66	苴	I -66	苴	②-50	蟲
1-67	韭	I -67	韭	②-51	瓠
1-68	茶	I -68	茶	②-52	莢
1-69	果羸	I -69	果羸	②-53	芃蘭
2-1	芫	II -1	芫	②-54	菲
2-2	蒿	II -2	蒿	②-55	茶
2-3	芩	II -3	芩	②-56	薺
2-4	甘瓠	II -4	甘瓠	②-57	苓
2-5	臺	II -5	臺	②-58	匏
2-6	萊	II -6	萊	②-59	葑
2-7	莪	II -7	莪	②-60	葷
2-8	芑	II -8	芑	②-61	蘋
2-9	粟	II -9	粟	②-62	藻
2-10	遂	II -10	遂	②-63	白茅
2-11	菑	II -11	菑	②-64	蕨
2-12	莞	II -12	莞	②-65	薇
2-13	蔚	II -13	蔚	②-66	藟
2-14	稂	II -14	稂	②-67	芣苢
2-15	女蘿	II -15	女蘿	②-68	蔓
2-16	芹	II -16	芹	②-69	繁
2-17	綠	II -17	綠	②-70	蔚
2-18	藍	II -18	藍	②-71	稂
2-19	白華菅	II -19	白華菅	②-72	女蘿
2-20	瓜瓞	II -20	瓜瓞	②-73	芹
2-21	董	II -21	董	②-74	綠
2-22	荏菹	II -22	荏菹	②-75	藍
2-23	秬	II -23	秬	②-76	白華菅
2-24	秠	II -24	秠	②-77	瓜瓞
2-25	糜	II -25	糜	②-78	董
2-26	芑	II -26	芑	②-79	荏菹
2-27	鬯	II -27	鬯	②-80	秬
2-28	來牟	II -28	來牟	②-81	秠
2-29	稌	II -29	稌	②-82	糜
2-30	藜	II -30	藜	②-83	芑
2-31	茆	II -31	茆	②-84	鬯
				②-85	來牟
				②-86	稌
				②-87	藜
				②-88	茆